

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-19

学校名・団体名	八王子市立下柚木小学校
HPアドレス	http://hachioji-school.ed.jp/syuge/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ICTを活用した子供と地域を共に育てる作品展
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>ICTを活用することで、児童の作品を中心にあらゆる来場者が共に楽しめる作品展を目指す。そして作品展が、児童の豊かな感性を育み、造形への意欲を喚起するとともに、児童の愛校心を育て、地域と学校をつなぐ機会にする。</p>	

八王子市立下柚木小学校は、多摩ニュータウンに位置し、平成26年度開校20周年を迎えた。学区は、築20年未満の団地やマンション、首都大学などが建ち、古くからの地域が無い。当校は、コミュニティスクールとして学校運営協議会を設置しているが、PTAの組織は無く学校や地域に対する愛情は希薄である。

当校では、開校以来隔年で図画工作科の作品を中心に展示する作品展を開催しており、平成27年度は作品展の年であった。そこで、地域と学校をつなぐきっかけのひとつとしての作品展を企画した。

日時 平成27年11月13日(金) 児童鑑賞 8:45~15:15
保護者鑑賞 15:15~20:00

11月14日(土) たてわりアート集会 8:30~10:20
保護者鑑賞 10:20~20:00

会場 下柚木小体育館

展示方法、方針

- (1) 美術館、テーマパークのように「テーマ別展示」をする
- (2) ブースごとの仕切り、境界は、6年生の“ステキナイスとペアクション”と、イーゼル、パネル、共同製作などを使って作る。
- (3) どの学年の、どの作品が、どこのブースに展示してあるのかわかるようなプログラムの会場図にする。
- (4) ICTを活用した展示、参観者が参加できる展示を積極的に取り入れる。

① 全校児童の学年を超えたたてわり班の鑑賞ウォークラリー

② 作品展来場者の参加型の展示

・巨大スマートボール

・入って絵が描ける「おかしの家」

・RICOH紙アプリ「紙アクアリウム」描いた絵を鑑賞するアプリ。読み込んだ絵が画面の中を魚のように自由に泳ぎ回る。絵の泳ぎ方は描き方によって変わる。平成26年度開校20周年記念で設置された体育館舞台スクリーンを使った。子供たちの描いた魚が、PCに取り込まれスクリーンの海を泳いだ。

「紙レーサー」今回助成金で購入したデジタル液晶テレビを使った。紙に描いた車を、PCに取り込み画面上のコースでレースを行う。ゲームタイプのアプリ。絵の特徴が「速度/加速力/グリップ力/燃料」に置き換えられ、画面上のサーキットでレースをする。4名まで同時対戦できる。

③ ICT活用展示

・RICOH紙アプリ(説明上記)

・ARの活用

作品展会場(当校体育館)内に掲示されたARマーカーにあらかじめ専用アプリ(COCOAR)がインストールされたスマホやタブレットをかざすと、子供たちの作品紹介動画が流れるARを活用した。この取り組みは、帝京大学教育学部福島研究室の協力を得、動画の撮影とARの作製は、尾池が企画し、学生が行った。

(4) 20:00までの開場時間を生かした展示とイベント

・6年生の陶芸ランプシェード(LED光源)を展示。6時以降、1時間ごとに一日3回、会場を約10分間ランプシェードの明かりだけにするランプシェードタイムを実施した。

夜20:00まで開場時間を延長したことで、都心に勤務する保護者や地域の方など、より多くの来場者を呼ぶことができた。また、ランプシェードタイムのような昼間には無いイベントや、繰り返し遊びたい「巨大スマートボール」・入って絵が描ける「おかしの家」・RICOH紙アプリ「紙アクアリウム」「紙レーサー」などの参加型展示などを設けた。その効果で、昼間に来場した人が、また夜に来場したり、二日間連続で足を運んだり、リピーターも多かった。

会場内には、紙レーサーを親子で楽しむ姿や、就学前の児童が何度も巨大スマートボールで遊ぶ姿が見られた。まさに下柚木小の体育館が、テーマパークさながらに、子供から大人まで楽しめる場となった。学年を超えた子供たちのつながりを深め、学校に対する愛情を深め、地域と学校をつなぐ機会となった。以前は、閉館間際の作品展会場は、閑散としたものであったが、今回は、20:00になっても満員で「蛍の光」を会場に流して、お帰り頂くほどであった。

ARの取り組みも、来場した保護者や地域住民から好評を得ることができた。ICTを活用した次世代に向けての作品展との評価もあり、これにより学校教育に関心を深めたことが伺える。

今後の展望としては、平成28年度は、平成27年度の実践をもとに、ARの活用を拡げ、下柚木小の教育活動全体に生かしたい。そしてICT環境の充実と共に、児童のICT活用力を高めたい。併せて保護者や地域住民の学校への関心を高め、愛校心を育てていきたいと考えている。